

恵泉メディカル・カフェ in 多摩市立グリーンライブセンターの時代的意義

樋野 興夫

(順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授、恵泉女学園理事)

The New Era of Keisen Medical Café in Tama Green Live Center

HINO Okio

Abstract

Cancer Philosophy Clinic in Medical café is new concept. The Tama Green Live Center will provide the place for Medical café. This might has great impact for Lifetime Educations. The Tama Green Live Center should be a symbol of Tama Medical Town.

はじめに

2011年4月29日多摩市立グリーンライブセンター「オープニングセレモニー」が開催され、筆者は「恵泉 がん哲学外来 in 多摩メディカル・カフェ」で講演する機会が与えられた。恵泉女学園理事長、学園長、大学学長をはじめ、多摩市長、多摩市グリーンボランティア連絡会代表の出席もあり会場は満席であった。また、午後は「メディカル・カフェ」の実践の場が与えられた。

多摩市立グリーンライブセンターの存在意義:多摩のオアシス

多摩市立グリーンライブセンターは、多摩センター駅から歩行者専用道パルテノン大通りを進み、徒歩7分の所にある散歩コースであり、新渡戸稲造(1862-1933)の弟子:河井道(1877-1953)の創立「恵泉女学園」の園芸教育に相応しい「器」ともなる「多摩のオアシス」の風情を醸し出す。「グリーンライブセンター」は駅から近く自分で歩け、広い歩行者専用道路の両脇には、ホ

テル、映画館、お店が並び、憩いを誘う。さらに、「グリーンライブセンター」の庭からは、そびえ立つ街のビルの存在にも気づき、孤独感も和らぐことであろう。帰りには、家族と一緒に街で買い物も出来る。その様な空間に、「メディカル・カフェ」が常設されることによって、多摩市の政策でもある「医療機関と地域との連携＝>メディカル・タウン構想」の拠点になる予感がする。

「Union is Power」(協調・協力こそが力なり)

2011年3月11日の東日本大震災(マグニチュード9.0)から2ヶ月が過ぎようとしている。「泣くのに時があり、ほほえむのに時がある。嘆くのに時があり、踊るのに時がある」(伝道者の書3章4節)の厳しい現実である。今は、まさに「泣く時、嘆く時」である。78年前の1933年3月3日にも、今回と同様に三陸で地震の大災害があったと記されている。その時、新渡戸稲造は被災地宮古市等沿岸部を視察したとのことである。その惨状を目の当たりにした新渡戸稲造は「Union is Power」(協調・協力こそが力なり)と当時の青年に語ったと言われている。まさに、今にも生きる言葉である。

人生において、誰しも、地震、津波に限らず惨事に直面する。病気も然りである。「電子計算機時代だ、宇宙時代だといってみても、人間の身体の出来と、その心情の動きとは、昔も今も変わってはいないのである。超近代的で合理的といはれる人でも、病気になって、自分の死を考へさせられる時になると、太古の人間にかへる。その医師に訴へ、医師を見つめる目つきは、超近代的でも合理的でもなくなる。静かで、淋しく、哀れな、昔ながらの一個の人間にかへるのである。その時の救いは、頼りになる良医が側にいてくれることである。」(吉田富三:日本の経済、1968年、『がん哲学』110ページ参照)の真実性を、「がん哲学外来」での対話を通して実感する日々である。「がん患者の表情・心の動きの観察」は、「森を見て、木の皮まで見る」業務に生きる病理学者の特技でもあり特異的な時代的出番を感じる。

「がん哲学」の時代的運用

筆者は、癌研で「病理学」をスタートして、「山極勝三郎・吉田富三」を学び、

2003年「山極勝三郎生誕140年&吉田富三生誕100年」を参画する機会が与えられ、それが『がん哲学』の実現に繋がった。「がん哲学」とは若き日から学び続けている南原繁(戦後初代の東大総長)(1889-1974)の「政治哲学」と吉田富三(元癌研所長・東大教授・佐々木研究所長)(1903-1973)の「がん学」をドッキングさせたものである。「がん哲学=生物学の法則+人間学の法則」であり、「がん細胞で起こることは、人間社会にも起こる」ことである。

日本国は「劣化(正常細胞の死)とがん化(異常細胞の増殖)」の同時進行の現状ではなかろうか? 人間は、緩慢な変化は、気づかない生物である。よって「社会のがん化の早期発見」も困難であろう。しかし、「がんの原因論を明確」にし、「がんの制御の根拠」を示して、「がんの進展・阻止」の「実際の提示」と「外部と相互作用する開かれた複雑系では、初期状態が同じでも、外部から意識的に適時に介入すれば、ある特異点で分岐し多様性のある制御」の「方策の提言」は可能であろう。それが、「予防と治療」の原理である。人間社会の諸現象との類似性は具象的な「がん哲学」の時代的運用へと導く。

下記の名古屋の医師夫妻から、レンブラントの「放蕩息子の帰還」(ルカの福音書15章11-32節)が贈られてきた。父、兄、弟のそれぞれの姿にその時の状況・雰囲気が伝わり、深い人間学を静思する時となった。「喜びも愛いも」ない、「自己中心的・自己尺度的」な兄タイプの「動機」は、何時の時代にも存在する。まさに「兄タイプ症候群」である。

- * 癌細胞は身の内=放蕩息子とその兄
- * 正常細胞(使命の自覚と任務の遂行)の社会学(「自己制御と犠牲」)vs 癌細胞(真の目標の喪失)の社会学(エゴイスト)
- * 癌化の予防(「共同体の理想像=使命に燃える細胞集団」の構築)

「がん哲学外来」の目指す処方箋

昨年、日野原重明先生(聖路加国際病院理事長・同名誉院長、聖路加看護学園理事長)の白寿〔99歳〕のお祝いで講演の機会を与えて下さった名古屋の医師夫妻から、1954年シュバイツァー博士のアフリカのランバレネ病院に行かれた野村実博士(1901-1996)の『野村実 著者集』(上・下巻)が送られて来

た。早速、読書の時ともなった。特に下巻の「医療と福祉」は、現代に生きる内容であり医療者にとって必読の書であると思えた。そこには、「ロゴセラピー」(フランクルの提唱)について書かれてある。対話によって「その人らしいものが発動してくる」、「ことばというものを通じて外に出てくる」、「人間の独自性」であろう。まさに、「大切な存在」(to be)と言ってくれる者の「声」であろう。「患者さんの目を見てあげなさい」という「人間学」である。アウシュビッツを自ら体験したフランクルの「希望」(『夜と霧』)は、「明日が世界の終わりでも、私は今日りんごの木を植える」(ルター) 行為を起こすものであろう。まさに、「がん哲学外来」の目指す処方箋でもある。

日野原重明先生のサイン入りの『平静の心—オスラー博士講演集』(日野原重明・仁木久恵訳、医学書院)も贈られて来た。大いに感激した。「医学の座右銘」は、当時、ジョンズ・ホプキンス大学教授であったオスラー博士(1849-1919)のトロント大学での招待講演(1903年)の記録である。

- (1)「医学以外のことにも関心を持ち、教養を高めよ」
- (2)「心から慕える偉人を選び、その書を系統的に読め」
- (3)「寝る前に30分を読書に」

は、まさに筆者が若き日に学んだ教訓でもあり、その実践が「内村鑑三、新渡戸稲造、南原繁、矢内原忠雄、吉田富三の5人の読書遍歴」へと繋がった。

「がん哲学 10カ条」

筆者は、戦後初の東大総長「南原繁」教え子の出会いに始まり、学生時代、夜を徹して読書に耽った。それが、今の「南原繁研究会[学士会館]」に繋がり「南原繁 著作集全10巻」の通読の2巡目になるとは、不思議である。南原繁の後任の「矢内原忠雄」を知り、さらに、両者の師である「内村鑑三・新渡戸稲造」へと広がった。新渡戸稲造の「知的協力委員会」(ユネスコの前身)は、「難局の日本国」にあって、不死鳥の如く「21世紀の知的協力委員会」として蘇り、「時代の申し子」的な「賢明なる寛容のオアシス」になる予感がする。

「がん哲学」の10ヶ条は、

- (1) 世界の動向を見極めつつ歴史を通して今を見ていく
- (2) 俯瞰的に病気の理を理解し「理念を持って現実に向かい、現実の中に理念」を問う人材の育成
- (3) 複眼の思考を持ち、視野狭窄にならず、教養を深め、時代を読む「具眼の士」の種蒔き
- (4) 自分の研究に自信があって、世の流行り廃りに一喜一憂せず、あくせくしない態度
- (5) 軽やかに、そしてものを楽しむ。自らの強みを基盤とする。
- (6) 学には限りないことをよく知っていて、新しいことにも、自分の知らないことにも謙虚で、常に前に向かって努力する。
- (7) 段階ごとに辛抱強く、丁寧に仕上げていく。最後に立派に完成する。
- (8) 事に当たっては、考え抜いて日本の持つパワーを十分に発揮して大きな仕事をする。
- (9) 自分のオリジナルで流行を作れ！
- (10) 昔の命題は、今日の命題であり、将来のそれでもある。

「がん哲学外来 2大法則」

『がん哲学外来』は、生きることの根源的な意味を考えようとする患者と、がん細胞の発生と成長に哲学的な意味を見出そうとする「陣営の外」に出る病理学者の出会いの場でもある。

「がん哲学外来 2大法則」は、

- (1) 暇げな風貌
 - (2) 偉大なるお節介
- である。

「偉大なるお節介」vs「余計なお節介」の違いの考察

「偉大なるお節介」は、「他人の必要に共感すること」であり、「余計なお節介」と「偉大なるお節介」の微妙な違いとその是非の考察が、これからの大きな課題となることであろう。また「他人の人々に注意を向ける」には、「暇げ

な風貌」が必要である。現代に求められるのは「暇げな風貌」と「偉大なるお節介」であると感ずる今日この頃である。「暇げな風貌」と「偉大なるお節介」は「悠々と謙虚」を生む。「優雅な感情を養うは、他人の苦痛に対する思いやりを生む。しかして他人の感情を尊敬することから生ずる謙遜・慇懃の心は礼の根本をなす」(新渡戸稲造)

最近、「偉大なるお節介症候群」の認定証が授与されている。診断基準は、(1)「暇げな風貌」、(2)「偉大なるお節介」、(3)「速効性と英断」と謳われている。「冗談を実現する」、愉快的仲間達の「真の気分転換」の「革新性」である。まさに、これこそ「悩める時代」の要請である。新渡戸稲造の「Sense of humor」の心意気である。多摩市立グリーンライブセンターの「多摩メディカル・カフェ」は、「偉大なるお節介症候群」のユニークな実践の場となろう。

「対話型セラピー研修センター構想」

夏休み、学生・社会人向けの集中講義の形で研修プログラム(園芸療法を含め)を組み、3回研修会(3年間)に参加された学生・社会人に修了書・認定証を発行・授与されるのも「生涯教育センター」としての務めであろう。学生の教育の一貫としても「対話型セラピー研修センター構想」は時代の要求と考える。これは、全国の先陣として、「スケールの大きい、愛情豊かな」、「次世代の人間教育」の新機軸の核になる構想となろう。

おわりに

人間は、自分では「希望のない状況」であると思ったとしても、「人生の方からは期待されている存在」であると実感する深い学びの時が与えられている。

「表面的なhappy」vs「内から湧き出るjoy」の違いの考察の時でもある。

「恵泉メディカル・カフェ」は、「Origin of fire」の如く「次世代の園芸療法」のモデルとなり、今後「メディカル・カフェ」が全国に広がる予感がする。